

和田 山蘭（わだ・さんらん）

1、プロフィール

歌人。蘭菊会、東北詩社を興し、「東奥日報」で活躍した県歌壇の先駆者。若山牧水の歌誌「創作」に参加、上京して同誌の編集に携わり県内歌人とも連携した。書道家としても著名。

<生没>

1882(明治 15)年4月6日 ~ 1957(昭和 32)年1月 13 日

<代表作>

歌集『落日』『泡雪ふる頃』『野びる』『酒壺』『きさらぎ』『松風』『津軽野』

<青森との関わり>

北津軽郡松島村に生まれる。短歌結社を興し、県内誌紙に短歌、評論を発表。上京後も県歌壇と接触。

2、作家解説

本名は直衛。明治 36 年青森師範卒業。翌年加藤東籬と蘭菊会を興すとともに、金子薫園の短歌研究会にも入る。40 年「東奥日報」紙上に発表した「昨年の歌壇—東奥日報に現はれたる歌人と歌」という文は、大塚甲山との論争を引き起こし、それが他の歌人に波及、啓蒙的刺激を県歌壇に与えた。同 41 年牧水の処女歌集『海の声』に接し影響を受ける。44 年歌誌「東北」(東北詩社)を創刊。大正 2 年上京、歌集『落日』を出版。

その後、山蘭の活躍の期間は、第二次「創作」の時期にあたり、そこでは、実作・合評・編集に腕をふるい、牧水を助けた。雑誌経営の不振の時など彼はよく牧水の精神的支え役となった。同 12 年歌集『酒壺』を出版。昭和 2 年菊池知勇らとはかり、歌誌「ぬはり」を創刊。同 5 年歌集『きさらぎ』を出版。同 21 年歌集『松風』を出版。

この他に、青森黎明詩社から出版した歌集『泡雪ふる頃』『野びる』があり、自筆稿印影の歌集『津軽野』(昭和 38 年)がある。

山蘭の歌風は含みのある叙情性(牧水のいう「燃えたため熱気」)を指摘できるが、歌体の追求でも多彩であった。

書道家としては、大字仮名の主唱者としての功績が認められる。昭和8年泰東書道院の特別会員、同審査員となった。

3、資料紹介

○『津軽野』

図書

1963(昭和 38)年7月 20 日

230mm × 170mm

昭和 21 年より 22 年にかけての歌 97 首を収める。最後の歌集である。すぐ出版するつもりであったが、戦後の混乱期で延び延びになり、死後刊行されることになった。毛筆による肉筆原本を忠実に再現、和綴の体裁にしてある。